

## 『1 Q 8 4』 ー青豆の身体ー

浅利, 文子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

108

(終了ページ / End Page)

115

(発行年 / Year)

2011-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007185>

論文部門（院生）

# 『1Q84』 ——青豆の身体——

法政大学国際文化研究科博士後期課程三年  
浅利文子

\* 本稿は、国際文化情報学会における研究発表（2010年12月7日）の概略紹介です。紙幅の関係上、論考を裏付ける論証部分や詳細な注など、大幅に省略しておりますことをご了承ください。

## I はじめに——『1Q84』の多面性

村上春樹の最新長編『1Q84』<sup>(注1)</sup>は、2009年4月のBOOK1・2発刊に次いで、2010年5月にBOOK3が刊行され、驚異的な売り上げ数や続編の可能性など、各方面から注目される話題作となった。『1Q84』は、1960年代から80年代までの日本社会の変動を時代背景に設定して物語の骨格とし、日中戦争に巻き込まれた満州やサハリンを歴史的遠景として現代日本社会に疑問を投げかけて作者の時代と歴史に対する認識を示す一方、従来に変わらぬエンターテインメント小説としての要素もたっぷり盛り込んだ村上文学の一集大成である。また、『1Q84』は、以下のインタビュー・対談で語っているとおり、「総合小説」を目指す村上が長編小説として初めて挑んだ三人称小説でもある。

僕は、バルザックのような世俗そのものを書いた小説が好きで、この時代の世相全体を立体的に描く僕なりの『総合小説』を書きたかった。純文学というジャンルを超えて、様々なアプローチを

とり、たくさん引き出しを確保して、今ある時代の空気の中に、人間の生命を埋め込めればと思った。

(「村上春樹氏インタビュー『1Q84』への30年」上 読売新聞 2009年6月16日)

僕が『カラマーゾフの兄弟』みたいな小説を書きたいと言ったのは、一種の総合小説、十九世紀的な総合小説という文脈で言っています。総合小説とは何かというと定義が難しいんですが、いろいろな世界観、いろいろなパースペクティブをひとつの中に詰め込んでそれらを絡み合わせることによって、何か新しい世界観が浮かび上がってくる。それが総合小説だと僕は考えています。ということは、パースペクティブをいくつかに分けるためには、人称の変化というのはどうしても必要になってくるんですね。

(柴田元幸『翻訳教室』新書館 2006年2月 158～159頁)

また、男女2人の主人公が物語内世界を生きる物語という新機軸を打ち出した村上は、天吾と青豆に現代における物語の有効性を語らせ、『1Q84』にメタ物語という側面を与えている。

物語の役目は、おおまかな言い方をすれば、ひとつの問題をべつのかたち置き換えることである。そしてその移動の質や方向性によって、解答のあり方が物語的に示唆される。天吾はその示唆を手には、現実の世界に戻ってくる。それは理解できない呪文が書かれた紙片のようなものだ。時として整合性を欠いており、すぐに実際的な役には立たない。しかしそれは可能性を含んでいる。いつか自分はその呪文を解くことができるかもしれない。そんな可能性が彼の心を、奥の方からじんわりと温めてくれる。

(『1Q84』BOOK2新潮社 2009年4月 318頁)

青豆にはこの小説（『空気さなぎ』）が人々に受け入れられ、広く読まれた理由がわかるような気がした。（中略）それは特殊な環境に置かれた少女の、非現実的な体験についての物語ではあったが、そこには人々の自然な共感を呼ぶものがあった。たぶん意識下にある何かが喚起されるのだらう。だから読者は引きずり込まれてページを繰ってしまう。

（『1Q84』BOOK2新潮社2009年4月418頁・括弧内筆者）

こうした多面性を持つ『1Q84』については、多角的視点から問題を提起することが可能であるが、本論においては、身体、とりわけ女性主人公・青豆の身体が物語の展開といかなる関連性をもっているかという点に焦点を絞って考察を試みたい。

## Ⅱ 「1Q84年」を生きる身体

『1Q84』の物語の原点は、小学校4年生の初冬、青豆が放課後の教室で天吾の手を握りしめたことにある。その20年後、30歳になった天吾と青豆が空に2つ月の浮かぶ「1Q84年」という物語世界に引き込まれてゆくのは、天吾が深田絵里子（通称「ふかえり」）の『空気さなぎ』をリライトしたこと（注2）を契機として、本人たちも気付かないうちに天吾と青豆を包み込む物語が起動して、2人を10歳の記憶の原点へ向かって遡及させる物語の力が働いたと説明できるだろう。

ただ一度握り合った手の感触を通じて、青豆から天吾に無言のうちに受け渡された「パッケージ」は、作家を志す天吾が『空気さなぎ』をリライトし自分自身の物語世界を見出したことを契機に発見され、天吾と媒介者「ふかえり」との「オハライ」によって、20年後に始めて紐解かれる。その「オハライ」とほぼ同時刻に「さきがけ」のリーダー・

深田保を殺害した青豆は、天吾と出会わないまま、<sup>メデイエーター</sup>「ふかえり」の身体を通じて天吾の子供を身ごもったことを感受する。青豆は、深田保殺害直前、自分の殺そうとしているのが単なる少女レイプ犯ではなく、神の声を聴く「王」に擬えられる存在であることを知る。一方、天吾は愛人・恭子を失ったことがきっかけとなって母親の幻影から解放され、認知症に陥り死にゆく父と初めて向かい合い、父との別離を体験する。

このように、『1Q84』には、もう一つのあり得べき世界——物語空間としての「1Q84年」——を生きることによって、十歳の記憶の原点へ遡及し、それまで自己を呪縛してきた〈父〉を殺す経験を経て、1984年に帰還する青豆と天吾の姿が描かれている。青豆と天吾は、「1Q84年」という物語世界、すなわち自らの内的世界において、初めて自身の深層にわたかまるトラウマの原点に向き合い、それぞれ〈父殺し〉という試練を経た後に、「小さなもの」とともに生きるため、1984年に帰還するのである。

### Ⅲ 青豆の身体

青豆は、小学校5年生のとき、「証人会」の信仰にすべてを捧げる両親の下から離れて叔父の家族に身を寄せ、早くから自立せねばならなかった。彼女が学生時代からソフトボールチームの中心選手として活躍し、高級スポーツ・クラブで筋肉トレーニングとマーシャル・アーツ担当のインストラクターを務め、つねに身体を「念入りに鍛えあげ」ているのは、何より「自分の身を護」り<sup>(注3)</sup>、「孤児」として生き延びてゆく必要があったからである。「身長は一六八センチ、贅肉はほとんどひとかけらもなく、すべての筋肉は念入りに鍛えあげられている」<sup>(注4)</sup> 青豆にとって、身体とは、誰にも頼らずに自立するための唯一の拠り所であった。しかし、マーシャル・アーツのクラスにおける「擧

丸蹴り」がスポーツ・クラブの上司の不興を買ったように、自立と自衛のために鍛え上げられた青豆の身体は、次第に過剰な攻撃性を帯びてゆく。夫の暴力によって自殺に追い詰められた親友・大塚環への思いから、妻に暴力を振るう男性を次々殺害する青豆の身体は、時に行きずりの男性とセックスを享樂することでしか安定を得られなくなっている。青豆の身体に交錯するソフトボール、筋肉ストレッチング、マーシャル・アーツ、殺人行為そして享樂的セックスは、彼女の人間関係と生の様相を特徴づけ、規定する重要な要素である。

10歳のとき天吾と手を握り合ったこと以外にも、青豆の人間関係は、そのほとんどが身体的要素によるつながりで表現されている。たとえば、大塚環とはソフトボールのチーム・メイトであり、旅先ではベッドの中で互いの身体を触りあった経験がある。柳屋敷の老婦人・緒方静恵は、広尾のスポーツ・クラブの会員で、青豆のマーシャル・アーツのクラスに参加したことが縁で知り合い、個人的な筋肉トレーニングのインストラクターを務めるうち、婦人の依頼を受けて殺人行為を重ねるようになる。中野あゆみとは、「性の饗宴」のチームを組み、やはりベッドの中で身体を触れ合う経験を持つ。そして深田保には、殺害直前にもかかわらず念入りな筋肉ストレッチングを施し、それが身体を通じた深い交流となる。

その三十分後に、二人はそれぞれに汗をかき、激しく息をついていた。まるで奇跡的なまでに深い性行為を成し遂げた恋人たちのように、男はしばらくのあいだ口を利かなかったし、青豆も言うべき言葉を持たなかった

(『1Q84』BOOK2新潮社2009年4月233頁)

青豆の身体は「天吾の立ち上げた物語の中」を生きることによって、

深田保を殺害してリトル・ピープルのレシヴァたる「病根を『削除』」<sup>(注5)</sup>  
<sup>メディアエーター</sup>  
 し、媒介者・ふかえりの介在を得て天吾との「愛」の証を身内に宿し、  
 新たなる再生への手がかりを得たと理解することもできよう。しかし  
 それなら、天吾とともに1984年へ向かう際にも、青豆が、信じても  
 いない「お祈りの言葉」を唱えるのは、なぜなのだろうか。

「肉体こそが人間にとっての神殿であり、たとえそこに何を<sup>まつ</sup>祀るに  
 せよ、それは少しでも強靱であり、美しく清潔であるべきだ」という「揺  
 らぎなき信念」<sup>(注6)</sup>によって鍛え上げられた青豆の身体と、その身体  
 に刻み込まれた「お祈りの言葉」は、幼少時「証人会」の信仰に生き  
 ることを強制されたトラウマの顕現に他ならない。それは青豆におい  
 て、未だに「お祈りの言葉」が身体化されている証拠である。つまり、  
 青豆は意識の上では「証人会」の信仰を否定しているが、現実を生き  
 る身体は信仰に似た絶対的規範を求めている。また、そうでなければ、  
 青豆がカルトがかかった緒方静恵の「正しいこと」のためにその身を危  
 険にさらし、何人もの男たちを殺害するはずもなかっただろう。

青豆がひたすら天吾の子供だと信じようとする「小さなもの」<sup>(注7)</sup>  
 がリトル・ピープルにつながる存在である可能性は否定できない。そ  
 れが『1Q84』BOOK 3の残した最大の謎である。この先『1Q  
 84』に続編が書き継がれるとしたら、青豆の身ごもった「小さなもの」  
 とリトル・ピープルとの関わりが明らかにされ、「小さなもの」がタ  
 マルの推測どおり〈声を聴くもの〉であるかどうか<sup>(注8)</sup>、解明されな  
 ければならないだろう。

## 注

- (注1) BOOK 1・2・3 新潮社刊
- (注2) 『空気さなぎ』は、ディスレクシアである「ふかえり」が語った物語を戎野先生の娘アザミが文章化し、新人賞に応募した作品である (BOOK 1 179 頁) が、アザミが文章化する際どのような手直しが施されたか等については、作品中では明らかにされていない。
- (注3) BOOK 1 28 頁
- (注4) BOOK 1 25 頁
- (注5) BOOK 2 422 頁
- (注6) 「肉体こそが青豆にとっての聖なる神殿だったし、常にきれいに保っておかなくてはならない。塵ひとつなく、しみひとつなく、そこに何を祀るかは別の問題だ。それについてはまたあとで考えればいい。／彼女の肉体には今のところ贅肉はついていない。ついているのは筋肉だけだ。彼女は毎日鏡の前でまったくの裸になり、その事実を細かく確認した」(BOOK 1 326 頁) 「清潔で健康な身体ひとつがあれば、それで不足はない。／彼女は子供のころから、装飾のない簡素な生活に慣れていた。禁欲と節制、物心付いたときにそれがまず彼女の頭に叩き込まれたことだった」(BOOK 1 327 頁)
- (注7) リトル・ピープルの騒ぐ雷雨の晩に、「リーダー」が「死に際して」青豆の「胎内に」「セットしていった」「小さなもの」には、やはりリトル・ピープルとの関連が感じられる。深田保は、リトル・ピープルの由来について青豆に語ったとき、当初「ふかえり」が「小さな人たち」と呼んでいたのを「その方が言い易かったから」「わたしがその名前を『リトル・ピープル』に変えた」と説明しており (BOOK 2 242 頁)、「小さなもの」という言い回し自体にリトル・ピープルとの関連が強く感じられるからである。
- (注8) BOOK 3 531 頁



参考文献

- 『1 Q 8 4 スタディーズ BOOK 1』若草書房 2009年11月  
『1 Q 8 4 スタディーズ BOOK 2』若草書房 2010年11月  
鈴木和成『村上春樹・戦記／「1 Q 8 4」のジェネシス』彩流社 2009年8月  
『村上春樹「1 Q 8 4」をどう読むか』河出書房新社 2009年7月  
村上春樹研究会『村上春樹の「1 Q 8 4」を読み解く』データハウス 2009年7月  
空気さなぎ調査委員会『村上春樹「1 Q 8 4」の世界を深読みする本』ぶんか社  
2009年9月  
『「1 Q 8 4」村上春樹の世界』洋泉社 Mook 2009年9月  
『大澤真幸 THINKING「O」4号』「4号特集 もうひとつの『1 Q 8 4』」2010年7月  
内田樹『もういちど村上春樹にご用心』アルテスパブリッシング 2010年11月  
小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』講談社現代新書 2010年10月  
平居謙『村上春樹の「1 Q 8 4 Book 3」大研究』データハウス 2010年5月  
村上春樹ロングインタビュー(『考える人』新潮社 2010年夏号)  
鈴木和成「村上春樹の『1 Q 8 4』を行く」(『文学界』2010年2月号)  
鈴木和成「『1 Q 8 4』のアメリカを行く」(『文学界』2010年9月号)  
鈴木和成「誰もが<死後の生>を生きている」(『文学界』2010年6月号)  
福嶋亮太「『半歩のずれ』が呼び起こす神話的構造」(『すばる』2010年7月号)  
福田和也「暴力論の消息」(『新潮』2010年6月号)  
中島一夫「空虚と反復」(『文学界』2006年8月号)  
鼎談 内田樹 都甲幸治 沼野充義「村上春樹の“決断”」(『文学界』2010年7月号)  
対談 小森陽一 ジェイ・ルービン「『1 Q 8 4』と漱石をつなぐもの」(『群像』2010  
年7月号)